# 京都の二階建て町屋の天正期から慶長期にかけての多様化について

## ー町人の生活の様子の観点からの考察ー

## 序論

本研究の目的は、なぜ京都の二階建て町屋が天正期（1573～1592）から慶長期（1596～1615）にかけての多様化したのかを明らかにすることであり、これは本稿の出発点となる問題提起である。京都の町屋については、小寺（1976）が天正期から慶長期を境として出梁造[1]があらわれる、厨子二階屋[2]が多くなる等の変化があったと明らかにしている。丸山（2004）は、「京程図解抄井京都屋造之初」[3]の記述に注目し、その理由を豊臣政権が町並景観を二階建てで「屋並高下なきやふ（屋根の高さがまわりより低くなる事がない様）」揃える事を

---

[1] ２階部分を１階よりもせり出させた構造（『【奈良井宿の見どころ】出梁造り（だしばりづくり）https://riba-kurata.com/dashibari, 2024 年 7 月 28 日閲覧）

[2] 天井の低い二階をもつ建物の様式（『京町家の名残を残す、厨子二階の家』https://www.r-toolbox.jp/stories/usersreport/77256/#:~:text=%E3%80%8C%E5%8E%A8%E5%AD%90%E4%BA%8C%E9%9A%8E%EF%BC%88%E3%81%A4%E3%81%97%E3%81%AB,%E3%81%97%E3%81%9F%E3%82%82%E3%81%AE%E3%81%AA%E3%81%AE%E3%81%A0%E3%81%9D%E3%81%86%E3%80%82, 2024 年 7 月 28 日閲覧）

[3] 「京程図解抄井京都屋造之初」（『長刀鉾町文書』所収 、京都市歴史資料館架蔵フィルム）「（略）上下屋並取続きてハ見ゆれとも、ひらや又ハ葛屋多く、きひ柱におほくハ大棚也、殿下様伏見より京え上りたもふ御成筋なれハ見苦敷覚しめさるゝ 、奥ハいかにもあれ、まつ表ハニ階作にして角柱に作るへし（略）」

命じたからであると述べている。 さらに、丸山（2007）は上記の豊臣政権の命令によって京都の町屋の多層・多様化が助長されたが、町人は町屋の二階での生活習慣が無かったため、費用を抑えた厨子二階が普及したと示唆しており、

> 二階に生活習慣がない町人は、少ない経費で二階建てを実現するため、低い厨子二階とする場合が多かったようです。直立が難しい二階は物置程度・・・（丸山, 2007, p.34-35）

と述べている。加えて、慶長期以降は町人の建築が自由に任されたことによって、町屋がさらに多層・多様化し、二階での生活習慣の定着とともに本二階建て[4]の増加が見られたが、寛永 19 年の江戸幕府による規制が始まってからは町屋の低層・均質化が進んだとしていて、

> 多層・多様化が進む京都の町なみに、変化が現れたのは江戸時代に入ってほぼ三〇年後…厨子二階が増加し、…二階表が閉鎖的になる傾向があるのです。（丸山, 2007, p.38-39）

---

[4] 2 階の天井を高くし、居住用として使われる（『八清 https://www.hachise.jp/kyomachiya/isho/isho_1_3.html#:~:text=%E6%98%8E%E6%B2%BB%E6%9C%AB%E6%9C%9F%E3%81%8B%E3%82%89%E5%A4%A7%E6%AD%A3%E3%81%AB%E3%81%8B%E3%81%91%E3%81%A6,%E3%81%99%E3%82%8B%E6%A7%98%E5%AD%90%E3%81%8C%E8%A6%8B%E5%8F%97%E3%81%91%E3%82%89%E3%82%8C%E3%82%8B%E3%80%82, 2024 年 7 月 28 日閲覧）

と述べている。以上から、先行研究（主に丸山の論説）では京都の二階建て町屋は、町人の建築が自由に任されたことによって天正期から慶長期にかけて種類が多層・多様化したと考察するところまでは至っている。 しかし、なぜ町人の建築が自由に任されたことによって二階建て町屋が多様に発展したのかは明らかにされていないという点で検討が不十分だといえる。豊臣政権下では普及していなかった二階での生活習慣が慶長期以降定着した要因が分からなければ、町屋の多層・多様化が進んだ要因を完全に明らかにしたことにはならない。そのため、二階建て町屋が多様になった町人目線での背景や要因を明らかにすることで、二階建て町屋と当時の文化との関係を明らかにして、丸山（2007）の研究の欠落を補充する必要がある。

以上の背景から、本稿では慶長期以降においてなぜ京都の町屋の二階での生活習慣が定着したのか（RQ）を尋ねることで、なぜ京都の二階建て町屋が天正期から慶長期にかけての多様化したのかという問題をめぐる議論の前進に貢献することを目的とする。リサーチクエスチョンに対し、①「町屋の一階の店としての機能が拡張したことにより生活空間が二階に移らざるを得なかったためではないか」または、②「町人の財力が増したためではないか」と仮説を設定する。「町屋の一階の店としての機能が拡張したことにより生活空間が二階に移らざるを得なかったためではないか」という仮説は、厨子二階が主流だっ

た時代には定着していなかった二階での生活習慣が、二階建て町屋の多様化とともに定着していったことと、町屋の「見世」の役割に関係があると考え、設定した。「町人の財力が増したためではないか」という仮説は、二階での生活習慣が普及していない豊臣政権の時代でも特別富裕な町人は本二階建ての町屋を建てたということから、安土桃山時代前後に増加した富裕町人が二階を富の備蓄場所として使用したことをきっかけに二階での生活習慣が定着したのではないかと考え設定した。本稿では一つ目の仮説について検証を試みる。

本稿における方法は以下の通りである。まず第 1 節にて、慶長期において、京都の町屋の一階が全て見世の空間であったか、天正期はそうでなかったかを検証し、第 2 節にて、慶長期に町屋の二階が生活空間として使用されるようになったかを検証する。第 3 節では、横方向に町屋の敷地面積を広げられなかった要因があったかを検証する。

## 第 1 節：天正期・慶長期の町屋の一階の検証

本節では、慶長期において、京都の町屋の一階が全て見世の空間であったか、天正期はそうでなかったかを検証する。検証にあたっては、天正期の絵画資料

《洛中洛外図屏風（歴博乙本）[5]》と慶長期・元和期（1615～1624）・寛永期（1624～44）の絵画資料《洛中洛外図屏風（吉川本[6]・舟木本[7]・神戸市博本[8]・勝興寺本[9]・歴博Ｄ本[10])》を用いる。

まず、天正期の資料について、町屋の数（A）と一階が見世の空間とそうでない空間で構成されている町屋の数（B）から、一階が見世の空間とそうでない空間で構成されている町屋の数の割合を検証する。なお、集計する町屋は、本節の検証内容が確認できるもののみとする。結果は下図に示す。

| | A（戸） | B（戸） | B/A（%） |
|---|---|---|---|
| 洛中洛外図屏風<br>（歴博乙本）（図 1） | 68 | 68 | 100 |

以上より、天正期において、京都の町屋の一階は見世の空間とそうでない空間で構成されていたと言え、一階が全て見世の空間で構成されている町屋は全体の 0%だと分かる。

次に、慶長期・元和期の資料について、町屋の数（A）と一階が全て見世の空

---

[5] 1580 年代の作とされている。国立歴史民俗博物館所蔵。
[6] 慶長年間半ば頃の作とされている。福岡市博物館所蔵。
[7] 元和初年（1615）頃の作とされている。東京国立博物館所蔵。
[8] 元和年間の作とされている。神戸市立博物館所蔵。
[9] 慶長末から元和年間頃の作とされている。高岡市雲龍山勝興寺所蔵。
[10]寛永年間の作とされている。国立歴史民俗博物館所蔵。

間で構成されている町屋の数（B）から、一階が全て見世の空間で構成されている町屋の割合を検証する。なお、集計する町屋は、本節の検証内容が確認できるもののみとする。結果は時代順に下図に示す。

| | A（戸） | B（戸） | B/A（%） |
|---|---|---|---|
| 吉川本　　（図2） | 20 | 13 | 65 |
| 舟木本　　（図3） | 9 | 6 | 66.7 |
| 神戸市博本　（図4） | 17 | 13 | 76.5 |
| 出光美術館本（図5） | 10 | 2 | 20 |
| 勝興寺本　　（図6） | 5 | 3 | 60 |
| 歴博Ｄ本　　（図7） | 53 | 32 | 60.4 |

以上より、ほとんどの資料で6～7割の町屋の一階が全て見世の空間で構成されていることがわかるため、天正期に0%であった「一階が全て見世の空間で構成されている町屋」は、慶長期以降大幅に増加しており、商業空間が拡張されたと言える。

## 第2節：慶長期の町屋の二階の検証

本節では、慶長期以降に町屋の二階が生活空間として使用されるようになったかを検証する。本節でも、検証にあたって慶長期・元和期・寛永期の絵画資料

《洛中洛外図屏風（神戸市博本・林原美術館本[11]・出光美術館本)》《祇園祭礼図[12]》を用いる。

慶長期・元和期・寛永期の資料について、町屋の数（A）と 2 階が生活空間として使用されている町屋の数（B）から 2 階が生活空間として使用されている町屋の割合を検証する。なお、集計する町屋は、本節の検証内容が確認できるもののみとする。結果は時代順に下図に示す。

| | A（戸） | B（戸） | B/A（%） |
|---|---|---|---|
| 神戸市博本　　（図 8） | 6 | 2 | 33.3 |
| 林原美術館本　（図 9） | 47 | 33 | 70.2 |
| 出光美術館本（図 10） | 6 | 6 | 100 |
| 祇園祭礼図　　（図 11） | 13 | 9 | 69.2 |

以上より、2 階が生活空間として使用されている町屋の割合は全体的に高く、京都の町屋の二階での生活習慣は普及していたと言える。

## 第 3 節：横方向に町屋の敷地面積を広げられなかった要因

※未検証

[11] 元和年間の作とされている。林原美術館所蔵。

[12] 寛永年間の作とされている。京都国立博物館所蔵。

## 結び（現時点での検証まとめ）

以上より、

・京都の町屋の一階は、天正期においては必ず見世の空間とそうでない空間で構成されていたが、慶長期以降全て見世の空間で構成されている様式が普及した。

・京都の町屋の二階は、慶長期以降生活空間として利用されることが多くなったと言える。そのため、天正期において一階で商業空間と共存していた生活空間は、慶長期以降商業空間の拡張とともに二階に移っていったと言える。

しかし、商業空間の拡張が起こると、町屋の敷地面積の拡張が起こる可能性も十分に考えられるが、実際には生活空間が上方向に移動したため、京都の町屋の二階が多様化していった要因を明らかにするために、横方向に町屋の敷地面積を広げられなかった要因があったかを検討することも必要である。

## 参考文献

・小寺武久「中世京都の都市空間に関する考察（3)」(『日本建築学会論文報告集』第 240 号,1976.2,127－131 項)

・丸山俊明「17 世紀の京都の町並景観と規制」『日本建築学会計画系論文集』第 581 号,2004.7,167－173 項)

・丸山俊明『京都の町家と町なみ　何方を見申様に作る事、堅仕間敷事』

（2007.5,昭和堂）

# 画像資料別紙

本稿にて引用した絵画史料は下記の通りである。

【図 1】《洛中洛外図屏風（歴博乙本）》

（国立歴史民俗博物館 Web ギャラリー

https://www.rekihaku.ac.jp/education_research/gallery/webgallery/rakuchu_otsu/rakuchu_otsu_r.html, 2024 年 7 月 28 日閲覧）

【図 2】《洛中洛外図屏風（吉川本）》

（Google Arts &Culture 重要文化財 洛中洛外図屏風

https://artsandculture.google.com/asset/-/2gFykwtEijTMdQ, 2024 年 7 月 28

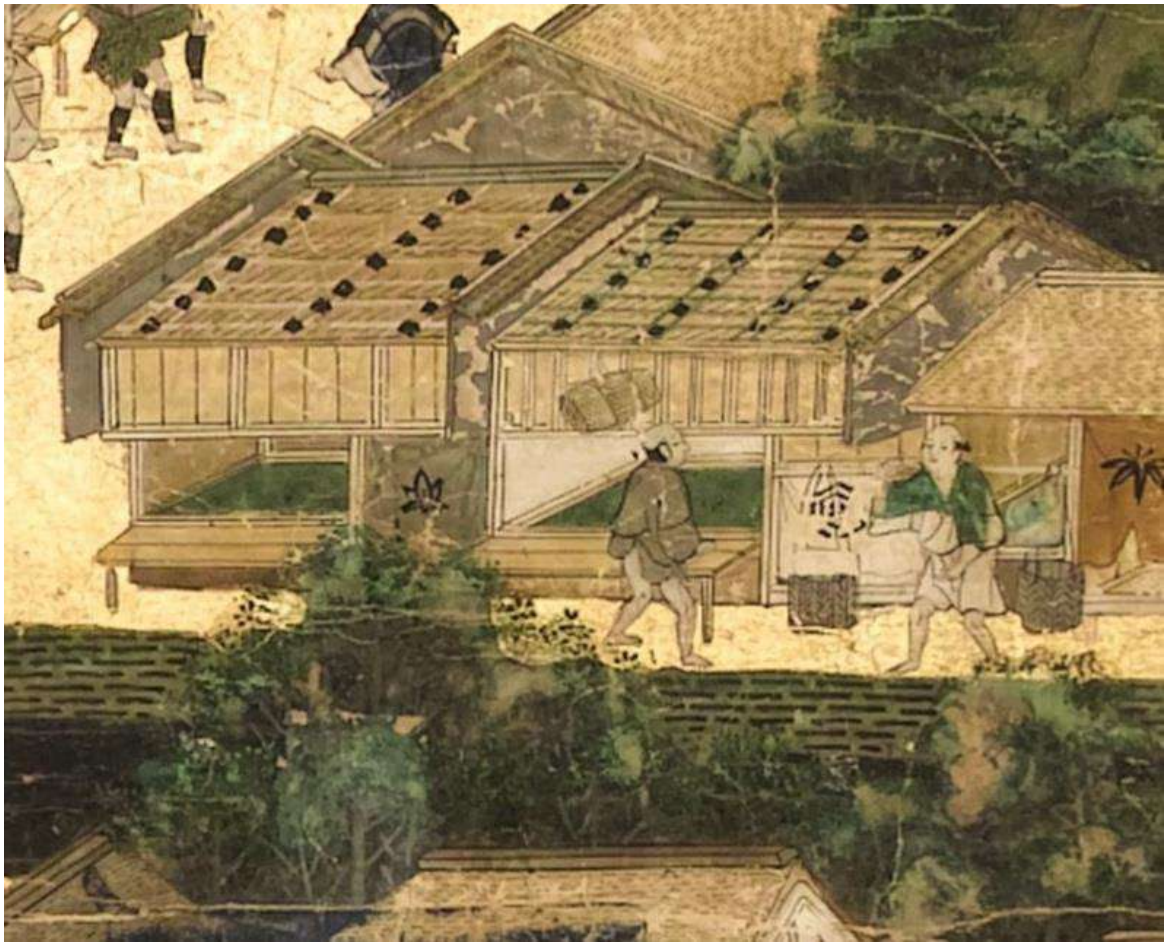
日閲覧）

【図 3】《洛中洛外図屏風（舟木本）》

（e 国寶　洛中洛外図屏風（舟木本）

https://emuseum.nich.go.jp/detail?content_base_id=100318&content_part_id=001&content_pict_id=044&langId=ja&webView=, 2024 年 7 月 28 日閲覧）

【図 4】《洛中洛外図屏風（神戸市博本）》



（Google Arts &Culture 洛中洛外図屏風（右隻）

https://artsandculture.google.com/asset/%E6%B4%9B%E4%B8%AD%E6%B4%9B%E5%A4%96%E5%9B%B3%E5%B1%8F%E9%A2%A8-%E5%8F%B3%E9%9A%BB-0002/KgGZPia8ONfxwA, 2024 年 7 月 28 日閲覧）

【図 5】《洛中洛外図屏風（出光美術館本）》

（出光美術館　洛中洛外図屏風

https://idemitsu-museum.or.jp/collection/painting/genre/02.php ,2024 年 7 月

28 日閲覧）

【図 6】《洛中洛外図屏風（勝興寺本）》

（高岡市雲龍山勝興寺/文化財デジタルアーカイブ　洛中洛外図

https://adeac.jp/shokoji/viewer/mp000010-200010/rkrgzl/, 2024 年 7 月 28 日

閲覧）

【図 7】《洛中洛外図屏風（歴博 D 本）》

（国立歴史民俗博物館 Web ギャラリー

https://www.rekihaku.ac.jp/education_research/gallery/webgallery/rakuchu_d/rakuchu_d_r.html, 2024 年 7 月 28 日閲覧）

【図 8】《洛中洛外図屏風（神戸市博本）》

（Google Arts &Culture 洛中洛外図屏風（右隻）

https://artsandculture.google.com/asset/%E6%B4%9B%E4%B8%AD%E6%B4%9B%E5%A4%96%E5%9B%B3%E5%B1%8F%E9%A2%A8-%E5%8F%B3%E9%9A%BB-0002/KgGZPia8ONfxwA, 2024 年 7 月 28 日閲覧）

【図 9】《洛中洛外図屏風（林原美術館本）》

（林原美術館　洛中洛外図屏風

https://www.hayashibara-

museumofart.jp/list/collection&S_56=%E5%B1%8F%E9%A2%A8, 2024 年 7

月 28 日閲覧）

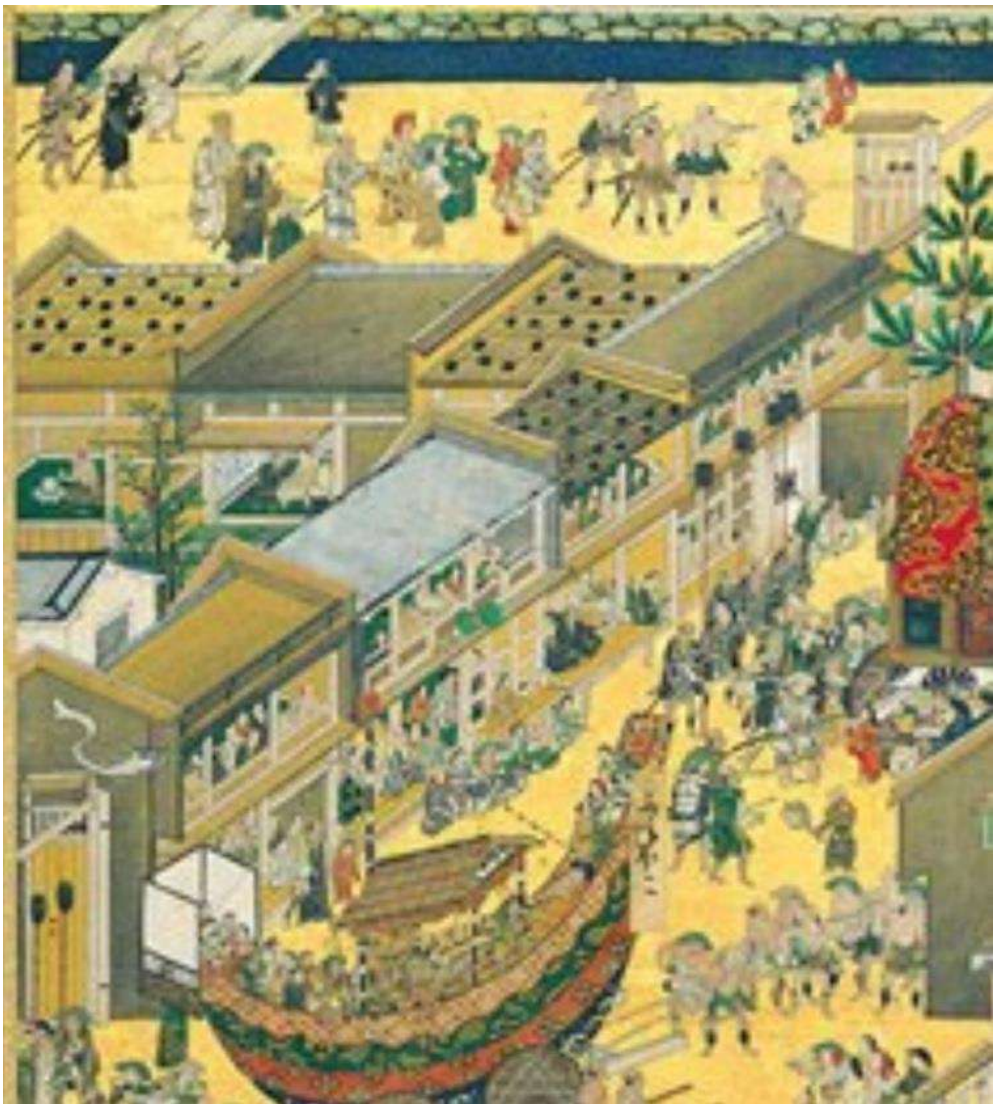
【図 10】《洛中洛外図屏風（出光美術館本）》

（出光美術館　洛中洛外図屏風

https://idemitsu-museum.or.jp/collection/painting/genre/02.php, 2024 年 7 月

28 日閲覧）

【図 11】《祇園祭礼図》



（Google Arts &Culture 祇園祭礼図屏風

https://artsandculture.google.com/asset/the-gion-festival-

unknown/LgH6BI57aXuCGg?hl=ja, 2024 年 7 月 28 日閲覧）